

テムズ川とアイリス・マードック

平井杏子

マードック文学における〈水〉の描写が、きわめて精緻かつ豊潤であることは夙に知られている。それにも拘わらず一方では、「水を潜り抜けるとは死を通過するに等しい」(『水と夢—物質的想像力試論』1969)というガストン・バシュラルの言と同様に、精神の死と再生という象徴的なテーマが、過剰に多用されているために、海や川などの現実界とどこか遊離しているような印象も、ときとしては拭いきれない。

ここで言うテムズ川とは、Cotswold 丘陵の Thames Head に源を発し、ロンドンを貫流して北海へ注ぐ、英国二千年の歴史を両岸に刻む全長340キロの大河である。歴史書、地理書を企図したという Jerome K. Jerome の *Three Men in a Boat* (1889) ならずとも、テムズ川を描出すれば、そこには深い歴史の闇から、何がしかの影が立ち上がってくるものだが、マードックの小説には、英国の〈時〉を象徴的にせよ遡源する気配はない。マードックが Jerome のこの本を、*The Sandcastle* (1957) の主人公モアの、勉強嫌いの息子 دونالدの書架に、そっと一冊だけ滑り込ませたのには、どのような意味があるのだろうか。

テムズ川を描いた作品の一例は、*Bruno's Dream* (1969) である。雨で氾濫したテムズ川の水が、Battersea Power Station の対岸にある家に濁流となって押し寄せ、ブルーノは階段の上から水中に転落したが、救出されて蘇生し、過去の苦悩を忘却したうえで、やすらかな死を迎える。

マードックは、ギリシア神話の忘却の川レー

テー (Lethe) を、〈苦悩の忘却〉という主題と結びつけて書いたのだが、ここでもテムズ川は、たんなる〈水〉でしかないのは、さまざまな〈事象〉の外形的形式から超然とし、〈物質的想像力〉に意味を見出すという、マードック独自の認識があるからで、それはバシュラルが、基本的四元素 (エレメント) の直接的イメージから生まれる想像力を、〈物質的想像力〉と呼び、事象の外形に目を奪われがちな〈形式的想像力〉よりも原初的で深いとしたことと同じである。

マードックとテムズ川との関わりは深い。第一作の *Under the Net* (1954) に出てくる Hammersmith と Chiswick の河岸は、マードックが子ども時代を過ごした場所であり、後年は Oxford に居住して、川での泳ぎを楽しんだ。1956年に、John Bayley と結婚したときには、Marlow の The Compleat Angler Hotel (Izaak Walton の *The Complete Angler* (1653) ゆかりのホテル) に泊まる予定だったが、予約ミスで Henry-on-Thames に宿泊した。マードックは生涯テムズの水とともにあったのだ。

だがベイリーは、回想録 *Iris — A Memoir of Iris Murdoch* (1998) で、アイリスには泳ぐことではなく「ただ水へのこだわりがあっただけ」と述べている。それはたとえば〈石〉を、「現実世界の一部として偶然的に存在するものではなく、究極のアイデアの世界を生きる、プラトンのな形象」としてとらえたことと同意義なのであろう。

歴史家になりたかったというベイリーの、アイ

リスの「歴史についての話はどこか表面的だった」という言葉は、吟味してみる価値がある。*The Sandcastle*の舞台 Surrey で、針葉樹の原生林を流れるテムズの川岸に、レインの車がタイヤをとられたとき、この流れの先の Runnymede では、かつてジョン王がマグナ・カルタ（大憲章）にサインをしたことが、モアの胸中をよぎ

らなかったか、あるいは Twickenham で子ども時代を過ごしたブルーノの胸中に、土地の詩人 Alexander Pope と上流の Mapledurham House の美人姉妹との恋が懐かしい影を落としていなかったか、と考えるとマードック文学のもうひとつの側面が見えてくる。